京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（3 年計画の 1 年目）

１．研究課題

中日の近代哲学・思想の交差とその実践

The intersection between modern Chinese and Japanese philosophical thoughts and their practices

２．研究代表者氏名

廖　欽彬

Liao Chin-ping

３．研究期間

2023 年 4 月-2026 年 3 月(1 年目)

４．研究目的

本研究は、1910～30 年代における、中日近代哲学・思想の交差と実践を考察することを目的とする。その際、1）西洋哲学の受容と展開、2）保守派と革命派という図式での検討が方法的特徴となる。

中国については、実証主義者の自由民主主義、新儒家の文化更新主義といった思想の流れにおける西洋哲学や諸帝国のイデオロギーへの対抗に注目して、その中国的特色を掘り起こす。日本については、「京都学派」や桑木厳翼らの哲学に焦点をあて、その西洋哲学への対抗として打ち出された日本的特色を浮き彫りにし、中国哲学の特徴と比較検討する。

以上の保守派の流れに対して、本研究では革命派にも視野を広げる。日本のマルクス主義者や、彼らから学んだ中国革命家たちの思想と実践を中心に、中日マルクス主義哲学の発展も研究の射程に入れる。これにより、中日における保守派の更新主義や日本主義の異同と、革命派の共産主義・社会主義の異同を同時に検討し、その特徴を比較検証する。

The purpose of this study is to examine the intersection between modern Chinese and Japanese philosophical thoughts and their practices during the 1910s and 1930s. The methodological characteristic of this study is to examine under the schema 1) of the reception and development of Western philosophy, and 2) of the conservative school and revolutionary school.

In the case of China, we will focus on the opposition to Western philosophy and the ideologies of the empires in the streams of thought such as liberal democracy of positivists and cultural revivalism of New Confucians, and unveil their Chinese elements. In the case of Japan, we will focus on the “Kyoto School” and the philosophy of Kuwaki Genyoku and others,

highlight the Japanese elements of their opposition to Western philosophy, and compare them with the characteristics of Chinese philosophy.

In contrast to the conservative school mentioned above, this study will broaden its perspective to the revolutionary school. The development of Chinese and Japanese Marxist philosophy, focusing on the thoughts and practices of Japanese Marxists and Chinese revolutionaries who learned from them, will also be included in the scope of this research. In this way, we will examine synchronically the similarities and differences between revivalism and Japanism of the conservation school, as well as between communism and socialism of the revolutionary school in China and Japan, and examine their characteristics.

５．本年度の研究実施状況

準備会もあわせると、全 6 回の研究会を実施した。準備会では廖班長より研究班の趣旨説明と研究班員の自己紹介があった。第 1 回から第 5 回まで毎回 2〜4 名の報告者と各司会を立てて研究班を実施し、近代日中哲学交差の総合テーマのもとで、班員及びゲストが自らの専門分野にひきつけて報告を行った。分野は哲学、政治、思想、芸術、宗教など多岐にわたるが、いずれも東アジア哲学を考察するうえで意義ある報告となった。報告は基本的に対面で実施し、参加者はオンライン・対面のハイブリッドで参加した。テーマに相応しく、日本、中国、台湾で活躍する哲学・思想の研究者に報告を担当してもらい、その後の意見交換も活発なやりとりがあった。本年度は研究報告を主体に運営を実施し、班員相互のテーマ認識や理解を深めることができたため、次年度は成果発表に向けて動ければと考えている。

６．本年度の研究実施内容

2023-08-02 第 1 回共同研究会 「国体に醇化された思想を受容する」という主張——大東文化協会から『国体の本義』への系譜 発表者 植村和秀 京都産業大学 司会 福家崇洋 京都大学

東アジアにおける哲学の展開と相互交流 発表者 藤田正勝 京都大学 司会 廖欽彬 中山大学

自己否定する主体、東アジア哲学の挑戦——田辺元、牟宗三、朴鍾鴻 発表者 カクミンソク 京都大学 司会 張政遠 東京大学

五四運動前後におけるマルクス思想の受容と伝播——李大釗、陳独秀の活動を中心に 発表者 蘇文博 総合研究大学院大学司会 廖欽彬 中山大学

2023-10-09 第 2 回共同研究会 二十世紀中国はなぜ平和的な改良の道を歩むことができなかったのか？——現代を背景にした「革命」と「改良」に対する歴史評価の問題もかねて 発表者 楊奎松 北京大学 司会 廖欽彬 中山大学

現代中国の政治的言説における「人民」について 発表者 王小林 京都大学 司会 福家崇洋 京都大学

2024-01-19 第 3 回共同研究会 美育をもって宗教に取って代わる――伝統的な士人の現代的転向 発表者 渠敬東 北京大学 司会 廖欽彬 中山大学
清代碑学の芸術的実践とその近現代書風への影響 発表者 朱天曙 北京語言大学 司会 呉孟晋 京都大学

2024-01-30 第 4 回共同研究会 清末から「五四」まで――中国現代思想の急進化過程の反省 発表者 唐文明 清華大学 司会 福家崇洋 京都大学
儒教復興と儒学解放の歴史的パラドックス――革命派の章太炎とマルクス主義歴史家の翦伯贊を手掛かりに 発表者 劉紀蕙 陽明交通大学 司会 石川禎浩 京都大学
現象学の儒学的転向と儒学現象学 発表者 朱剛 中山大学 司会 亀井大輔 立命館大学

2024-02-12 第 5 回共同研究会 なぜ「美」や「哲学」は問題になるのであろうか？――王国維の場合 発表者 銭鴎 同志社大学 司会 福家崇洋 京都大学
主体・環境・社会――三木清の残した思想の可能性 発表者 ロマリク・ジャネル 京都大学 司会 カクミンソク 京都大学

７．共同研究会に関連した公表実績

本研究班のテーマに関する出版として、西田幾多郎著・廖欽彬訳『自覚中的直観与反省』（商務印書館、2024 年 2 月）、藤田正勝『日本哲学入門』（講談社、2024 年 1 月）、郭旻錫『自己否定する主体――一九三〇年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』 （京都大学学術出版会、2024 年 3 月）があった。

８．研究班員

所内

福家崇洋、石川禎浩

学内

出口康夫(文学研究科)、上原麻有子(文学研究科)、カクミンソク(人間・環境学研究科)、張潔(文学研究科)、安部浩(人間・環境学研究科)

学外

廖欽彬(中山大学哲学系)、鈴木将久(東京大学大学院人文社会系研究科)、張政遠(東京大学大学院総合文化研究科)、植村和秀(京都産業大学法学部)、伊東貴之(総合研究大学院大学文化科学研究科)、蘇文博(総合研究大学院大学文化科学研究科)、王頌(北京大学哲学系宗教学系)、唐文明(清華大学哲学系)、張偉(中山大学哲学系)、盛福剛(武漢大学哲学学院)

9．共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数 総計	受入人数 海外研究者	受入人数 若手研究者（40歳未満）	受入人数 若手研究者（35歳以下）	受入人数 大学院生	延べ人数 総計	延べ人数 海外研究者	延べ人数 若手研究者（40歳未満）	延べ人数 若手研究者（35歳以下）	延べ人数 大学院生
人文研所属	1	3	0	0	0	0	9	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
京大内（人文研を除く）	3	6	2	2	2	1	11	8	8	8	2
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
国立大学	1	2	1	0	0	0	7	4	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
公立大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学	2	2	0	0	0	0	6	0	0	0	0
（内女性）		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(1)	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人	1	2	1	1	1	1	4	3	3	3	3
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関	6	7	7	0	0	0	12	12	0	0	0
（内女性）		(1)	(1)	(0)	(0)	(0)	(1)	(1)	(0)	(0)	(0)
その他　※	1	1	1	0	0	0	6	6	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	15	23	12	3	3	2	55	33	11	11	5
		(2)	(1)	(0)	(0)	(0)	(2)	(1)	(0)	(0)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合具体的な所属等名称を記載：例）高校教員 無所属の場合は機関数０とカウントし、この欄の記載不要	※その他は京都大学人文科学研究所人文学連携者1名でオブザーバーとして参加										

10．本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数		うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	5		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）	1	(1)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	産大法学	1	R5.4	教学刷新評議会の議題設定――第１回総会を中心に――（１）	植村和秀
2	Modern Asian Studies Review	1	R5.4	Workshop on Contemporary Chinese History	石川 禎浩, 久保亨, 村田雄二郎, 赵晋, 高岛航, 张静, 李昊, 沙青青, 河合玲佳, 周俊, 李玉蓉, 阮清华, 大桥史惠, 林超超, 横山雄大, 辛逸, 郑浩澜, 田武雄, 比护遥, 中兼和津次, 高洁, 金子肇, 刘建平, 小野寺史郎, 黄峥峥
3	現代中文学刊	1	R5.4	近二十年日本的中国現代文学研究	鈴木将久
4	現代思想	1	R5.5	九鬼周造の「メロス」をめぐって	藤田正勝
5	Diversifying Philosophy of Religion	1	R5.6	Yasukuni, Okinawa and Fukushima: Philosophy of Sacrifice in the Nuclear Age.	Cheung, Ching-yuen
6	軍事史学	1	R5.6	大岸頼好と国家改造運動	福家崇洋

7	Georg Stenger (Eds.), Faktum, Faktizität, Wirklichkeit. Phänomenologische Perspektiven	1	R5.7	Was ist unsere Wirklichkeit? Watsuji phänomenologisch denken, in: Inga Römer	Hiroshi Abe
8	David Meißner / Jörg Noller (Eds.), Die Zukunft der Metaphysik	1	R5.7	Der Mensch als politisches Wesen auf Basis der Natur?, in: Christopher Erhard	Hiroshi Abe
9	西田哲学会年報	1	R5.7	心身土ーおこり・いきおい・いきあわせ	安部浩
10	産大法学	1	R5.7	教学刷新評議会の議題設定——第 1 回総会を中心に——（2・完）	植村和秀
11	毛立平，張小鋼，牛貫烈主編『風尚，社会与風雅——十八世紀東西方的共時性』	1	R5.8	礼教的滲透、泛化及其发展——以中国為中心的近世東亜為例	伊東貴之
12	求真	1	R5.8	朴鍾鴻「ウリ」の哲学における民族的自己認識 三木哲学受容を一つの軸として	郭旻錫
13	求真	1	R5.8	物語と日本哲学	張政遠
14	求真	1	R5.8	所以と必然——朱子の天理観再考	楊立華著・廖欽彬訳
15	求真	1	R5.8	物語り論のゆくえ	廖欽彬
16	求真	1	R5.8	二つの「マルクスに戻れ」のディスコース——柄谷行人『力と交換様式』を読む	廖欽彬
17	高木博志編『近代京都と文化 「伝統」の再構築』	1	R5.9	戦時下の新村出	福家崇洋
18	井野瀬久美惠（責任編集）『つなぐ世界史』3 近現代/SDGs の歴史的文脈を探る	1	R5.9	概説 新世界秩序の相剋とファシズムの台頭	福家崇洋
19	ともしび	1	R5.9	親鸞聖人の人間としての	藤田正勝

				魅力・その信仰の魅力	
20	Cahiers Léon Chestov（The Lev Shestov Journal）	1	R5.10	The Adventure of Anxiety: Propagation of Anxiety And Questioning of Reality in Imperial Japan in the 1930s	Minseok Kwak
21	日本學研究	1	R5.10	巡禮與物語—關於災難記憶	張政遠
22	柄谷行人著・林暉鈞訳『力与交換模式』	1	R5.10	何処尋求未來棲身処：閲読柄谷行人『力与交換模式』	廖欽彬
23	比較文明	1	R5.11	横光利一における「朝鮮」の意味と李箱の対決意識	カクミンソク
24	山﨑眞紀子・江上幸子・石川照子・渡辺千尋・宜野座菜央見・藤井敦子・中山文・姚毅・鈴木将久・須藤瑞代著『日中戦時下の中国語雑誌『女声』』	1	R5.12	陶晶孫と田村俊子、そして『女声』	鈴木将久
25	『産大法学』第 57 巻第 3・4 号	1	R6.1	教学刷新評議会の会議運営ーー特別委員会設置までーー	植村和秀
26	倉本一宏編『貴族とは何か、武士とは何か』	1	R6.2	中国における文と武——侠と武人、門閥貴族、士大夫・郷紳と文人	伊東貴之
27	奈良県立大学ユーラシア研究センター編『奈良県立大学ユーラシア研究センター学術叢書 3　vol.3 奈良に蒔かれた言葉Ⅲ　近世・近代の思想』	1	R6.3	『古寺巡礼』で見出される世界——和辻哲郎覚書	植村和秀
28	奈良県立大学ユーラシア研究センター編『奈良県立大学ユーラシア研究センター学術叢書 3　vol.3 奈良に蒔かれた言葉Ⅲ　近世・近	1	R6.3	「天平文化」顕彰の思想	福家崇洋

	代の思想』				
29	法政大学大原社会問題研究所・榎一江編『無産政党の命運　日本の社会民主主義』	1	R6.3	社会大衆党結党過程の検討	福家崇洋

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際共著
1	『日本哲学入門』	藤田正勝	R6.1	講談社	
2	『自覚中的直観与反省』	西田幾多郎著・廖欽彬訳	R6.2	商務印書館	
3	『自己否定する主体――一九三〇年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』	郭晃錫	R6.3	京都大学学術出版会	

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

なし

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

14. 次年度の研究実施計画

令和 5 年度に引き続いて、「中日の近代哲学・思想の交差とその実践」をテーマとする 5 回の研究会開催を予定している。報告者も、令和 5 年度と同様に、班員のみならず、国内外から積極的にゲストを招いて報告を実施していく予定である。また、班員も増やすことで、より多彩で、活発な意見交換が実施できればと考えている。本研究班は日中哲学交差の検討を目的とすると同時に、東アジア各国でこのテーマに向き合う研究者の積極的な交流も企図している。令和 5 年度の研究会の開催を通して、研究班のテーマに関する相互の認識・理解が進んだと思われるため、令和 6 年度は班員の個人業績のみならず、『人文学報』などで研究班のテーマに関する小特集を組むなどして、積極的な成果発信につとめたい。

15. 次年度の経費

		開催回数	延べ人数	支出予定額（円）
国内旅費	一般旅費	1	3	90000
	招へい旅費	1		30000
海外旅費	一般旅費	1		100000
	招へい旅費	3		500000
謝金（講演謝金、研究協力謝金、その他の謝金）				230000
消耗品等経費				10000
その他				
合計				960000

16. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究班の成果として『人文学報』に「中日の近代哲学・思想の交差とその実践」をテーマとした小特集を企画予定で学術論文を掲載する。